

I 以下の設問に答えなさい。

文学における「深さ」とは何かについて考察した以下の文章を読み、「同じことが文学についていえる」とするなら、文学のどういった面がそれに相当するのか、自分の意見を述べてください。

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

Ⅱ 以下の設問に答えなさい。

欧米のモダニズムを再考察している以下の文章を読み、下線部の「二重人間」と「隔たり」という観点が当てはまる、20 世紀以降の具体的な作家名を挙げ、論じなさい。

ともあれ、ウルフやジョイス、フォークナーら英米系の文学にせよ、ムージルやトーマス・マンら独逸系の文学にせよ、言語や物語に前例のないほど強い負荷をかけることによって、旧來のリアリズムの現実感覚や時空を大胆にリプログラミングする実験的な運動であったことに違いはない。

ただ、繰り返せば、それは海からの撤収と引き替えであった。『白鯨』とは違って、モダニズムの小説には海の怪物はもちろん、鯨を資源として獲得し加工する労働者も出てこない。ジョイスの『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームが、消費を刺激する広告産業に属しながらも、消費への満たされなさを感じていたのは象徴的である。ジョイスの小説は恐ろしく手の込んだジョークとして読めるが、その異様な笑いの源泉は、海の労働（物質の世界との濃密な関わり）ではなく、都市の消費にあった。

ゆえに、われわれは超感覚的なものにアクセスしたモダニズムを評価するだけでなく、モダニズムの実験が何を失ったのかという問題にも注意するべきである。それを考えるのに最も重要な作家は、1857 年に帝政ロシアの支配下にあったポーランド領ウクライナのベルディチェフに生まれたジョゼフ・コンラッドである。というのも、コンラッドは 19 世紀のメルヴィルと 20 世紀のモダニズムを橋渡しする作家だからである。

革命運動にコミットしてロシア当局に逮捕された両親をもつコンラッドは、孤児になるものの数か国語をマスターし、海に強い憧れをもった。イギリス商船に乗り込んで、ロシア国籍を捨ててイギリスに帰化した後の彼が、船乗りを続けながら、母語でない英語で小説を書き始めたことは、彼の「二重人間」としてのあり方を際立たせた。ポーランド語と英語、船乗りと小説家——この二重の存在様式のあいだの「隔たり」が、コンラッドの文学を複雑なものにしている。

(福嶋亮大『世界文学のアーキテクチャ』pp.271-272 PLANETS／第二次惑星開発委員会 2025
引用に際し漢数字をアラビア数字に改め、また原注を省いた。下線は出題者による。)

Ⅲ 下の 1 から 15 の設問事項から 5 項目を選び、それぞれについて 200 字以内で説明せよ。記入は順不同でもよいが、設問項目番号は解答欄左上の () 内に明記すること。

- 1 小川洋子
- 2 橋本忍
- 3 張愛玲 (アイリーン・チャン)
- 4 アブドゥルラザク・グルナ
- 5 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン
- 6 『別れを告げない』
- 7 『カラマーゾフの兄弟』
- 8 『近代能楽集』
- 9 『第二の性』
- 10 『ババヤガの夜』
- 11 ガスライティング
- 12 エゴ・ドキュメント
- 13 ポストヒューマニズム
- 14 メタフィクション
- 15 H 氏賞

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次頁へ続く)

II ————ここから記入すること————

(裏へ続く)

————これより先の余白には絶対に記入しないこと————

設問番号()

[illegible]

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——